



新刊紹介 2

『医療費窓口負担と後期高齢者医療制度の全廃を医療保障のルネッサンス』 相澤與一 著

創風社 定価：1890円（税込）

筆者は、「序章」の「むすび」で執筆の目的について「本書は、日本の戦後史を中心に医療保障の流れを振り返りつつ『医療構造改革』を批判し、人間的な生存権保障のために医療の現状を抜本的に改善し完全保障を目指す方向を提示しようとするものである」と述べている。

この言葉の通り、医療費窓口負担と後期高齢者医療制度を入り口にしながら、日本の医療制度の変遷について、戦後だけでなく戦前を含めて詳しく記述しながら、その歴史をふまえて2001年から2006年の小泉構造改革により破壊された医療保障をどう再生すればよいのか、その方策を指し示すものとなっている。「日本における医療保障制度の形成史と民主的改革の展望」と名付けてもよい書であるが、大学の教科書ではないので、やはり本題がふさわしいのであろう。とにかく、日本の医療史をおさらいし、正確に復習する上でも、役立つ書である。

もう1つの特徴は、筆者自身の実体験を交えて、記述されていることである。このことによって、単なる医療構造改革批判の論文ではなく、より親近感のわく書物となっている。イギリス留学時代のNHS（ナショナル・ヘルス・サービス）でのガン手術、C型慢性肝炎の発症、ご子息の12年半にわたる闘病生活、そして、2008年1月26日の75歳の誕生日を迎えた直後に送られて

きた後期高齢者医療制度の被保険者証、などの事例を通して、医療保障制度への感謝の念とともに、それが苦しみを生み出すものともなり得ることを告発している。



筆者が「医療保障のルネッサンス」の第一歩として提起するのは、『老人医療費の無料化』と『子どもの医療費の無料化』の経験を再生・拡張し彼らの窓口負担をなくす改革から始めよう」ということである。2003年4月から70歳未満の現役世代の医療費窓口負担が3割に統一されて以降、経済的理由による受診抑制が顕著となっている。当会が昨年行った調査では、医療機関の4割が経済的理由による「受診中断」や「投薬、検査等の拒否」を体験したことがあると回答している。本来、医療費の窓口負担は無料であるべきである。その本来の姿を勝ち取るためにも、何から始めるべきかの提案が重要であり、筆者の提起には大賛成である。追加要望するならば、その第一歩に、窓口負担の上限である高額療養費制度の負担額をせめて低所得者だけでも大幅に引き下げることを加えていただければ、完璧である。

今日の政治状況のもとでは、抜本的な改善策とともに当面の改善提案が重要な意味を持っている。かつての自民党全盛期には、対案的な政策提起のみで対応できたし、国民の支持も一定得ることができたが、現在のような過渡的情勢のもとでは我々もそれにふさわしい政策的対応に熟達することが迫られている。

「歴史に学び、歴史を動かす」、そのためにふさわしい書である。

（中 重治・全国保険医団体連合会事務局長）